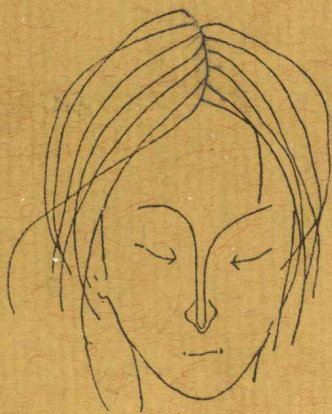
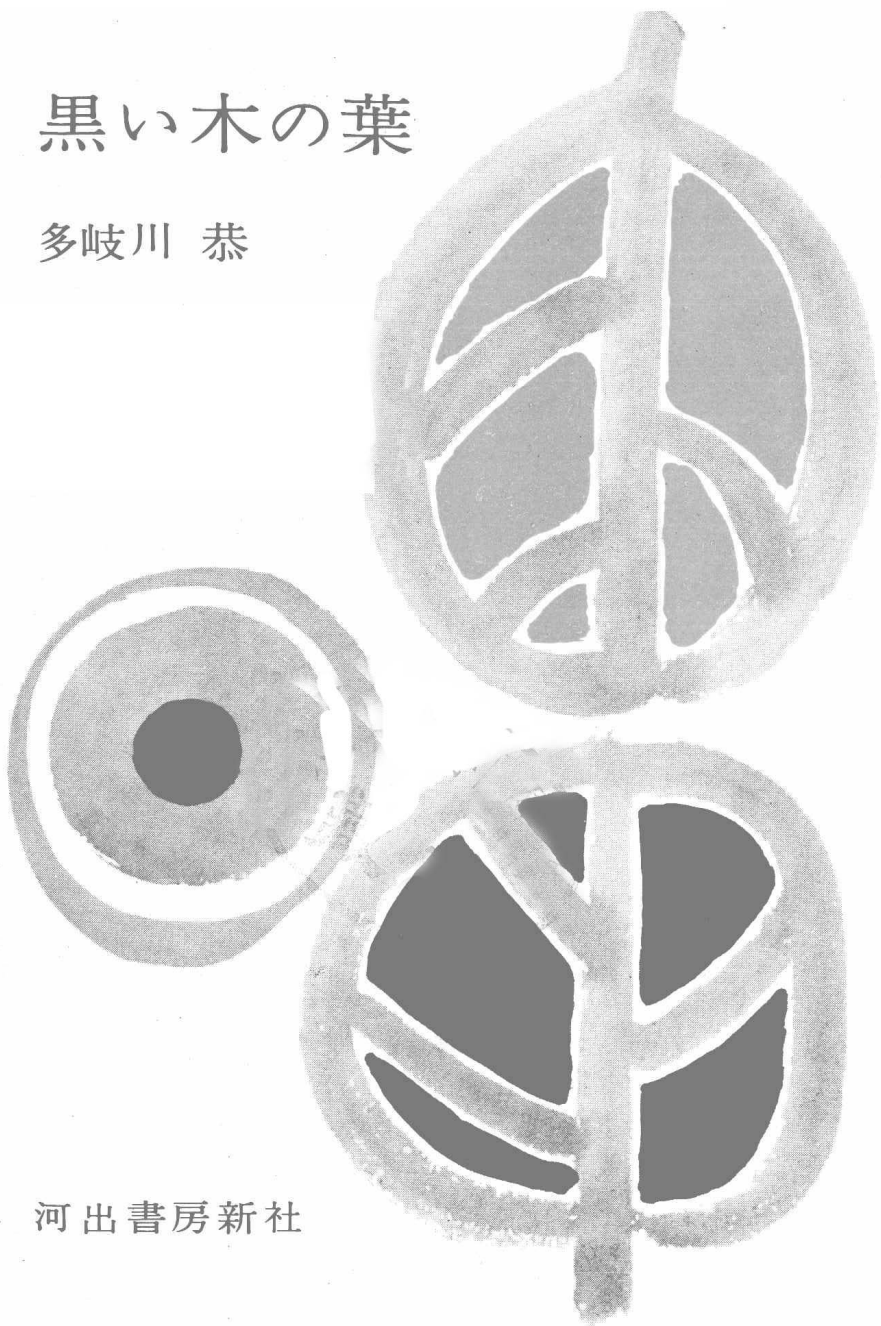


黒い木の葉



黒い木の葉

多岐川 恭



河出書房新社

作者略歴 大正9年、福岡県八幡市に生まる。八幡中学、第7高等学校を経て、昭和19年東京大学経済学部卒業。戦後、約1ヶ年銀行に勤め、23年毎日新聞社に入社。同33年長篇「氷柱」を河出書房新社から出版、同年長篇「濡れた心」(講談社刊)により江戸川乱歩賞受賞。同34年「落ちる」(河出書房新社刊)により第40回直木賞受賞。本名・松尾舜吉。

黒い木の葉

昭和三十四年三月二十五日 初版発行
昭和三十四年四月十五日 再版発行

定価 二七〇円

著者 多岐川 恭

発行者 東京都千代田区神田小川町三ノ八 河出孝雄

印刷者 東京都新宿区住吉町九五 草刈親雄

発行所 東京都千代田区神田小川町三ノ八 株式会社 河出書房新社

落丁本・乱丁本はお取り替えます

黒い木の葉 目次

みかん山



5

黄いろい道しるべ



37

澄んだ眼



73

黒い木の葉



105

ライバル
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
145

おれは死なない
◆◆◆◆◆
181

雲がくれ観音
◆◆◆◆◆◆◆◆
207

あとかき
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
258

裝釘
鹿江
恭夫

みかん山



今からもう十四、五年も昔の話になるのですから、まったく歳月は夢のように過ぎてしまふものですね。

そのころは私も、敝衣破帽に釣鐘マントの高等学生の一でした。まだ太平洋戦争には間があり、日華事変ちゅうとはいへ、世の中はそれほどせちがらくなってはいませんでした。それに、私の通っていた高等学校は風光明媚といつてよい南国で、人の心ものどやかだったようです。

現在も時に、私は、日本の学制から「高等学校」というものが永久に消えてしまったことに、深い愛惜の情を覚えずにはいられません。猛勉をやったり、万年床ぞうどの中で何日も小説本を読み散らしたり、かと思うと酒を飲んだり、芸者を揚げたり、女を買ったり、ふらりと旅に出てみたり……みんながテンデンバラバラな生活をしていながら、生徒といわず教授といわず、お互いの心に共通に流れるものがあり、通俗の道徳を超えたところで結びついていたような生活。どんなじだらくな暮しの中でも、そのシンにひたむきな人生への摸索があった……そんな「高校生活」をなつかしむのは、ひとり私だけでしょうか。

そのように、私の当時への追憶は、環境の美しさと相まって、かなり美しくいろどられているのですが、ただ一つ、私の心を暗くするシミのような思い出があります。それを今からお話す

るわけですが、土地のうちでも特に美しい場所で演じられた殺人事件であり、またその方法が恐ろしい滑稽さ……とでも言いますか、言いようのない不気味さをもっていたため、私は非常に強いショックを受けたものでした。

ここでちょっと話はわき道にそれますが、それで思い出されるのは「マントの効用」です。どういうことかと言うと、あのマントの中には、少々ものなら入る、ということなのです。……当時の高校生といえば、ずいぶん無茶なことをやったもので、郵便のポストと取っ組んで投げ倒した勇士が、たしか私たちの二、三年先輩にいたはずです。看板をはずして寮に持つてくるのが癖の男もいたし、朝起きるとすぐ、寮の廊下の窓ガラスを一枚割るといふ男もいたし……で、一番ふつうだったのは、行った先から何かマントに入れて持つてくることでした。喫茶店から灰皿を持つてくる。角砂糖のいっぱい詰まった壺を持つてくる。中には座蒲団を二つ折りして持つてくるのもいましたが、ある男が、大きな火鉢を持つて帰ったのには驚きました。火鉢はちよつと極端ですが、うまくマントの中にかくすと、案外人が気づかない……というのが、マントの妙な効用だったのです。話に入る前に、このことを承知して頂きたいのです。

さてその高校の所在地——曉市としておきましょう——曉市の山の手に、かなり広いみかん山がありました。清潔な遊歩道路のある市内のK山公園の裾にあって、その展望台に立つと、一面

のみかんの木のむこうには、イチゴ畑もうねうねと続いており、さらに、油絵のように色彩の豊かな丘陵の波に連なっています。遠くに、所々、南国特有の竹林のやわらかくケバだった薄緑が見えます。北ははるかに入江の真青な水をはさんで、紫がかった藍色の曉岳……この曉岳は朝、昼、夕方と微妙に山肌の色を変えるのです。私は展望台のひび割れたテーブルに頬杖をつき、遠く、うるんだように輝く入江を眺めながら、なんとなく深い溜息をついたものでした。まことにそれは青春の風景でした。

風が、さすがに水のような冷たさを帯びてきた十月も半ばを過ぎたある日の午後です。同級の浅淵、深海、私の三人はテーブルを占領して、ふりそぞろ陽光に暖まりながら、虫の羽音のものがく聞える静かな午後を楽しんでいました。テーブルの近くに、咲きくずれようとしている黄色いバラがゆれていたのを覚えています。深海はみかんの皮をていねいに小さくちぎって、Sの字に並べていました。Sというのは、このみかん山の経営者である笹野東作氏の妹の早苗さなえさんのイニシャルです。私たちは早苗さんを、「アルト・ハイデルベルヒ」のケティになぞらえたものですが、ロマンチックな高校生活にうつつけの美しい人でした。幾多の高校生と同じように、深海も早苗さんが好きだったのです。私たちは深海の感傷をとがめもせず、テーブルに並べられてゆくみかんの皮を眺めていました。

深海のような武骨一辺の、感傷のカケラも持ち合わさぬ男が、急にメランコリックになって、

おとなしくみかんの皮を並べているのは奇妙な眺めでした。私自身は一向に朴念仁^{へくねんじん}で女性には縁のないほうなので、なるほどきれいな人だな、とは思うものの、それ以上どうしようという気も起らないのですが、浅淵もどちらかといえば私に近いほうで、温かいが皮肉な微笑をうかべて、早苗さんをかこむグループを観察しているふうでした。

その日、あとから来ることになっていた矢坂と谷は、どちらも早苗さんに参っていた、というのが衆目のみるところで、ことに矢坂は、持ち前の「大人」らしさと積極性を發揮して、すでに早苗さんの心を得ていると信じられていました。矢坂を尊敬していた深海などは、「矢坂ならおれは譲るよ」とおでん屋で涙を流したという美談がありました。それから谷は、非常に内攻的な性格で、人に自分の内部をのぞかせない男なので、早苗さんにどれほどの愛情をよせているか分らなかったのですが、早苗さんをちらと見る眼付には、友人には決して見せたことのない輝きと、哀訴とも言えるような弱さがありました。

私たちが追加を注文したみかんを盆にのせて、早苗さんが木蔭の道から現われたのは、午後二時ごろでした。みかんは皮の厚い、かなり大型のものです。早苗さんは盆を胸のところでちよつと支えるようにして、はにかんで微笑していました。陽をうけた顔が童女のように丸く、幼なく見え、ひたいに木の葉の影がさしていたのを今でも覚えています。

早苗さんが盆をテーブルの上に置いた時、深海がテレかくしのように、

「おい、矢坂が来たぞ」

と言いました。なるほど、早苗さんの家に通じる小道を上ってくるのは矢坂でした。

ここで、早苗さんの家……笹野家を中心とした地形をのべてみます。

展望台から見下ろすと、家は直線距離にして約百五十メートルほどの所に、屋根と裏側の白壁を見せています。家の周囲はかなり広い空地で、所々さまさまの秋草が花を咲かせています。巾二メートルほどの道が家の正面からだらだらと百メートルばかり下り、そこでカーヴになって茂みに消えています。展望台は道のちょうど延長線上にあるので、矢坂は真正面に歩いてきていたわけです。この小道は、みかん山の入口から県道に出ます。みかん山への道と言えば、これだけです。ただもう一つ、家の裏側、展望台に上る道から、反対側のみかん、イチゴ畑の方向に別れる通路がありますが、これは道とは言えない代物しろもので、生い茂った雑草や灌木の間を曲りくねって、県道に出るには出られませんが、ふつうこの道を通る人はありません。県道の、前にのべたみかん山の入口から約五十メートルはなれて、この通路の出口があります。ですから、みかん山―早苗さんの家に誰が入りしたかということは、展望台から見れば一目瞭然なのです。

矢坂はゆっくりとした足どりで、いつものむっつりした白はくせきの顔を、いくらか、うつむき加減にして歩いていました。分厚なふちのロイド眼鏡がきらりと光ります。肌寒かったのか、マントのボタンを皆かけていて、それが文字どおり釣鐘に見えたものです。

早苗さんは、私たちのところに三分もいたでしょうが、女学生時代にあの曉岳に登った話などをしていましたが、

「おい早苗さん、早く帰れよ。彼が来てるんだぜ。……そうそう、彼は俳句を作って君にあげると言っていたよ。たおやめが……なんとかで、悲しきみかん山、とかいうんだ。悲しきみかん山……彼らしくていいじゃないかね！」

などとひやかされて、顔を赤くして下りて行きました。

なんとなく私たちは、ニヤニヤしていました。ちょっとしたラヴシーンが皆の心にえがかれていたのです。……早苗さんが家に帰りついたころ、私たちが耳にしたのは、しかし早苗さんの笑い声ではなく、おそろしい悲鳴のこだまでした……

私たちは一散に展望台を駆け下り、家の裏口から土間に入りました。

土間はずっと表の入口まで通じており、私の目にまず飛びこんだのは、表口に近く、早苗さんを抱いて呆然と立っている家のあるじ笹野氏の姿でした。

表口の敷居を入ったすぐの所に、マントを着たままの矢坂が、うつ伏せに倒れていました。早苗さんは笹野氏の胸の中に顔を埋めていて、きれぎれの荒い呼吸で肩をふるわせています。

「おい、矢坂！」

と叫びながら、深海がまず駆けよって矢坂の上半身を抱え上げました。首をだらりと下げていま

す。深海はかみつくように、

「笹野さん、矢坂はどうしたんだ。急に倒れたんですか？」

笹野氏は答えず、凝然^{きやうぜん}と立ちつくしたままでしたが、しばらくして、かすれた声で、
「知りません。早苗が叫んだので寢床から出てくると、矢坂君が倒れていたのです」
と答えました。

「矢坂が急に倒れるというわけはないよ」

落ちついた浅淵も、さすがに声をふるわせながらそう言うと、矢坂の顔をそっと手で抱きあげ、それから腕首をにぎりました。

「深海、そのままちよつと持っていてくれ」

浅淵は矢坂のマントのボタンを丁寧にはずしてから、私のほうに真蒼な顔を向けて低くささやきました。

「白家、見ろよ」

マントの下、サージの上着は血でべつとりと濡れ、心臓の位置に、服の上から海軍ナイフが柄元まで突き刺さっていたのです。

「笹野さん、死んでいますよ」

浅淵は笹野氏を見つめながら、静かに言いました。笹野氏も強いひとみで浅淵を見返していま

した。

「ぼくも、そう思っていました」

「矢坂のそばに、寄ってもみなかったのですね。なぜです？」

浅淵にしては激しい言葉でした。笹野氏はマスクのような表情で冷たく答えました。

「別に理由はありません。私とは関係ないことですからね。……失礼、ぼくは早苗を寝かせてきますから」

「あ、ちょっと。矢坂のほかに誰かいたようですか？」

「知りません。眠っていたのですから。早苗の声で起きたのです」

すると突然、深海が拳をかためて笹野氏に飛びかかろうとし、浅淵にとめられました。

「浅淵、離せ。おれはあいつをなぐる！」

笹野氏は深海を無視して、早苗さんを運びにかかりました。氣を失ってぐったりした早苗さんの重みは、胸をいためている笹野氏には無理でした。私は手をかしてやり、早苗さんの足をかかえました。無表情な笹野氏のやせた白い顔に、まばらな不精ひげが生えているのが、ひどく印象的でした。

死体はそのまま手を触れないことにし、私が警察に知らせに行くことになって、入口にくると出合頭に入ってきたのは谷でした。

「変だな。どうしたんだ。矢坂……」

と言いかけて、倒れている矢坂の姿に気づき、棒立ちになりました。私は、

「殺されているんだ」

とささやきました。そう自分で言いながら、嘘でもついているような気がします。谷ものろろと矢坂の上にしゃがみこんでいましたが、なんだかわけが分らぬといったぼんやりした表情をこちらへ向けました。

「ついさっきまで、おれたちは一緒に歩いていたんだ……」

「下宿と一緒に出たわけだね」

と浅淵。

「そうだ。それから、ついそこまで話しながら来たんだが、古本屋に本を売りにちょっと寄ったもんだから遅れてしまった。しかし、五分とはいなかったぜ」

「矢坂は先へ歩いて行ったか？」

「ああ。どうも、おれは分らんのだ。いつ、やられたんだろう？……彼は、早苗さんの家に入ったんだろ？」

「入ったよ。おれたちは展望台から見ていたんだ」

と私。深海がいらだたしげに口をはさみました。